

大学における社会化研究の成果と課題

—初等・中等教育との違いと予期的社会化に及ぼす要因に着目して—

* 菊池 美由紀

1. 問題の所在
2. 社会化とは何か
3. 大学の社会化の特徴
4. 予期的社会化とは何か
5. 大学のチャーターが学生の予期的社会化に及ぼす影響
6. 序列の低い大学におけるチャーターの機能と効果
7. 今後の課題

1. 問題の所在

本稿の目的は、大学生の社会化に関する文献レビューから、初等・中等教育とは異なる社会化の特徴と、学生の予期的社会化に及ぼす要因を明らかにすることである。

大学生の学力低下や職業意識の希薄な若者の増加を背景に、大学教育の意義・効果が問われている。教育はもはや暗黙裡に是とされるものではなく、そのアカウンタビリティが問われる時代になっている、と平尾他（2013）は指摘する。大学のなかでも特に文系に対する風当たりは厳しく、文系の諸学問は仕事には「役に立たない」と言われることが多い（本田編 2018）。この意見に呼応するように、昨今の大学生を対象とした研究では、大学教育が職業的能力の形成に役立っていることを大規模な量的調査に基づいて実証する研究が多くみられる（例えば、椿・和田 2020、小山 2019、本田編 2018）。

しかし、大学教育の効果は仕事に直接役に立つ知識技能の習得だけではない。大学が10代後半から20代初めという、人間の人格的発達のみわめて重要な時期を過ごす場であることを考慮すれば、特定の専門知識や技能を習得するだけでなく、より一般的な知識や能力を身につけ、社会や自分についての見方や将来の目的などを含めた広い意味での人格形成を形成することも

極めて重要である（金子 2012）。大多和（2019）もまた、大学教育が人格形成や「人づくり」にどのように関与しているのかを明らかにする研究が必要だと主張している。これは、大学教育を通じた「社会化」を明らかにする研究ということもできるだろう。社会化とは、自分の属する社会に適応してゆくために、その社会の規範や価値、その社会が必要とする知識や技能、その社会が要請する行動の仕方などを習得する過程であり（森岡 2016）、知識や技能の習得に留まらない価値や規範の習得といった人格形成に関わる内容の習得を含んでいる。

大学における社会化を扱った研究は、主にカレッジ・インパクト研究（CIS）の領域で行われてきた。CISとは、大学内部の経験が学生の意識変容・行動変容に及ぼす影響を明らかにしようとするものである（山内 2004）。CISの代表的な研究者である Astin（1993）は、I-E-O モデルを作り、学生の大学入学前から有する特徴（=Input：親の職業・収入、高校での履修科目や進学理由など）が、大学内の要因（=Environment：大学の特徴、学生のピアグループや教員の特徴、カリキュラムなど）によって、どのように変化・成長するのか（=Outcome）を、大規模な学生調査から明らかにしている。アウトカムとしては、学生の成績や学習成果、学位取得を用いられることが多い（山田 2010）。日本でも CIS として、学部の組織構造や教育プログラムが学生の学習に対するエンゲージメントに及ぼす影響を分析した小方（2008）や、アメリカの学生調査（CSS）

* 名古屋大学大学院学生

と同一の調査項目を持つ日本の学生調査（JCSS）を用いて日米の学生の学習・生活行動の様態、ラーニングアウトカムの自己評価を比較検討した山田(2008)、学生の社会化に影響を与える大学の要因を分析した作田(1999)などがある。しかし Astin の I-E-O モデルでは、相関関係を説明できても因果関係を説明できないということ（山内 2004）、学生に対するあらゆる学校効果を学校の内部構造のみで説明しようとしており、大学を外部社会との関連でとらえるという視点を欠いていることなどが課題として指摘されている（丸山 1981, 中西 1998）。

さらに、大学は社会に出る前の最後の教育段階であることを考慮すれば、成績や学習成果、学位取得だけではなく、卒業後に参入する社会に向けた社会化も重要だと考えられる。日本の場合、大学の序列と就職先の序列は対応しており（小方 2012）、大学によって就職先は異なることが自明視されている。入口が出口を規定するのであれば、大学にふさわしい進路へと学生を水路づけ、就職先に適的な価値観や態度を身につけさせることによって、学生の内定可能性を高めることや、学生の職業への移行をスムーズにすることも大学教育の重要なアウトカムといえるだろう。しかし、I-E-O モデルに依拠した CIS において、大学教育の予期的社会化機能や、そのプロセスを十分に検討してきたとはいえない。

そこで本稿では、大学における社会化を扱った先行研究を整理することを通じて、初等・中等教育とは異なる大学の社会化の特徴と、学生の予期的社会化研究における到達点と課題を明らかにする。本稿の構成は以下のとおりである。第2節では、社会化の定義について確認し、第3節では大学における社会化の特徴を検討する。第4節では、予期的社会化に関する研究を概観し、第5節では、大学チャーターが学生の予期的社会化に及ぼす影響を見ていく。第6節ではチャーター理論を用いた実証研究を概観する。第7節では大学の社会化研究に関する特徴とこれまでの到達点を要約し、今後の課題について述べる。

2. 社会化とは何か

まずは、社会化という概念について確認しておく。社会化とは、自分の属する社会に適応していくために、その社会の規範や価値、その社会が必要とする知識や技能、その社会が要請する行動の仕方などを習得する過程である（森岡 2016）。教育社会学では社会化を、「個人がその所属する社会や集団のメンバーになっていく過程」とし、その条件として制度的価値な

いし文化の内面化を挙げることが多い（阿部 2011）。社会化を集団側から見た場合には、新しいメンバーに対して社会に適応するために必要な規範や価値観、その社会が必要とする知識や技能、行動の仕方などを習得させるということになる（Brim 1966）。

社会化は様々な定義されており、多少の食い違いがあるものの基本項として取り出されるのは、次の4点である（柴野 1985）。①社会化は、成員性の習得である。②社会化は、基本的に学習である。③社会化は、他者との相互作用を通してパーソナリティを社会体系に結び付ける過程である。④社会化は、社会体系の維持・存続にかかわる機能的要因である。このように、社会化研究は構造＝機能主義理論に基づいて組み立てられているという特徴がある（柴野 1977）。

3. 大学における社会化の特徴

社会化研究の中でも、学校を対象とした研究は初等教育を中心に行われることが多い。初等教育段階が、訓練・教育・社会化に不可欠な時期だからである（Margolis 編 2001）。初等教育において子どもたちは、学校生活を円滑に行うために家庭とは違う学校の価値規範を身につけることが期待される（武内・岩田 2011）。よって、初等教育段階を対象とした研究では、いかにして「児童」としての振る舞いを身につけるのかという「学校的社会化」のプロセスが検討される（粕谷 2018）。

他方、大学における社会化を扱った研究には初等教育・中等教育を対象とした研究とは異なる以下のような特徴がある。第一に、これまでの社会化が考慮されるということである。溝上(2018)は、大学生のキャリア意識は変わりにくいこと、大学1年生が有するキャリア意識の半数は、中学生から高校生前半で考えられ始めること、半数近くの人が高校2年時の資質・能力を大学1年次まで変化させていないことなどを縦断調査から明らかにした。よって、大学に入学してきた学生の資質・能力を、大学教育によって学生をゼロベースで育てることは難しいと述べている。大学における社会化は白紙の状態から始まるわけではない。大学入学までにどのような社会化がなされてきたのかを考慮する必要がある。

第二に、学生は独自の学生文化を有しているということである。麻生(1974)は、初等教育段階では教師＝大人の文化に支配され、顕在化していなかった子ども独自の文化は、年齢が上がるにつれて独自の生徒文化を形成し始めることを指摘している。大学においては、学生はもはや大学や教員の教え通りに動く受動的

な存在ではなく、大学の伝統や制度に規定されながらも独自の学生文化を作り、自ら考え行動する主体的存在なのである（武内 2003）。さらに、それぞれの大学には、同じような特性を備えた学生が集まってくることから、大学によって異なる学生文化が形成される（武内 2003）。Clark & Trow (1966) は、学生文化を“Vocational（職業型）”、“Academic（学問型）”、“Collegiate（大学適応型）”“Nonconformist（大学非適応型）”に分類している。また、金子（2013）は、学生を「高同調型」「独立型」「受容型」「疎外型」の4つに類型化し、類型別に学習経験の特徴と効果があると考えられる授業方法について述べている。金子の知見は、どのようなタイプの学生が多いかによって、大学における社会化のプロセスは異なることを示唆する。

第三に、学生の社会化には学内外の様々な要因が影

響を及ぼしているということである。先行研究では、大学における学習経験（濱中 2013, 松高 2008）やアルバイトでの経験（三保 2013, 関口 2010, 杉山 2007）といった学内外の要因が学生のキャリア形成に影響を及ぼすことが明らかにされている。さらに、Weidman (1989) や武内 (2008) は、大学生の社会化をモデル化しており（図1, 図2）、学生が入学前から有する特徴は（「学生の属性」）、大学内での経験や（「大学経験」）、大学外での経験（「親による社会化」「大学外での経験」「親による社会化」「大学外での経験」「大学外での経験」）を通して変容し、その結果として職業選択を行ったり、価値観を形成したりすることが示されている。どちらのモデルも、学生の社会化には学内の環境要因だけではなく、入学前の属性や学外の要因も影響を及ぼしているということ、社会化の効果として学生の職業選択や、特定の価値観を身につけるということが示

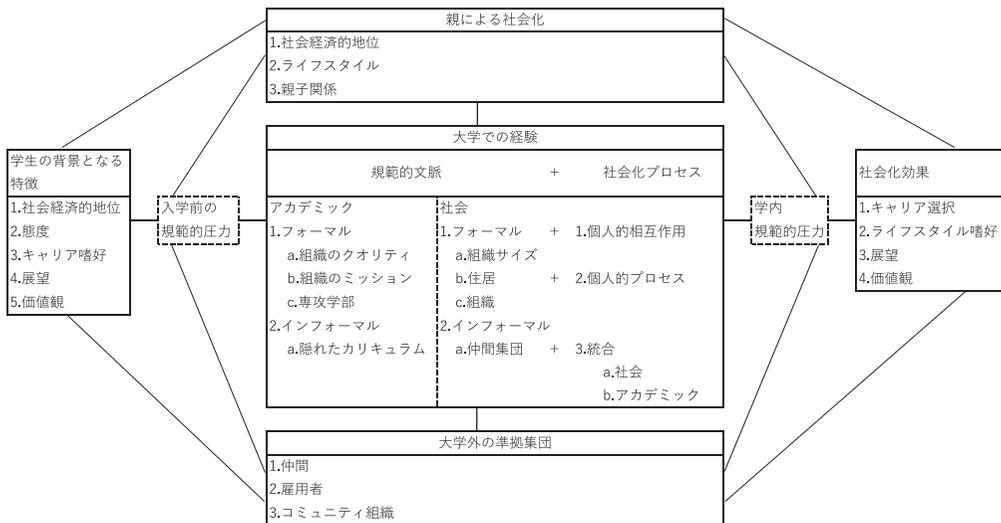


図1 「学部の社会化モデル」(Weidman 1989 p.299より抜粋し, 筆者翻訳)

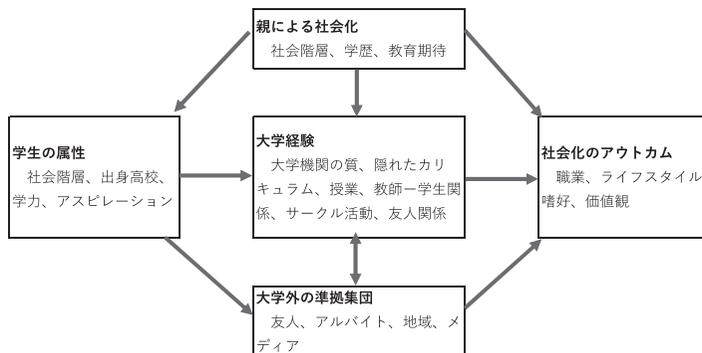


図2 「学生の社会化のモデル」(武内 2008 p.11より抜粋)

されている。しかし武内モデルでは、入学前の学生の特徴として出身高校や学力を考慮している。日本では、高校入学時に学力に基づく選抜が行われるため、高校内における学生の学力は比較的均質であり、上位ランクの高校と下位ランクの高校では、生徒の勉強に対する構えは異なること（荒川 2009）、大学入学前の学習経験や大学教育に対する構えによって、大学教育の効果は異なることが指摘されており（金子 2007）、出身高校の影響は大きいと考えられる。よって日本の場合、武内モデルの方が適格的であると言える。

第四に、大学と初等・中等教育では社会化の目的が異なるということである。初等教育では家庭と学校の違いを認識させる社会化が重要であるのに対し、大学は自立した大人になるための通過儀礼（イニシエーション）の場であり、アイデンティティを確立し、社会に出るための準備を行うことが重要になる（武内・岩田 2011）。中等教育は初等教育と高等教育の中間に位置づけ、両者をつなぐ役割を果たすものだと考えられる。学校段階が上がるごとに社会化の目的は変化していき、社会に出る前の最後の教育段階である大学では職業社会に向けた社会化がなされる。Weidman(1989)は、大学生は卒業後を見据えた決断を頻繁に行なわなければならない、将来のために望ましい目標を設定し、それを達成するための準備をしなければならないというプレッシャーに晒されていること、大学は学生の価値観や職業志望に影響を与える予期的社会化の場であることを指摘している。

このように、初等・中等教育とは異なる大学における社会化の特徴として、これまでの社会化の履歴を考慮する必要があるということ、所属する大学によって異なる社会化がなされ得るということ、社会化に影響を及ぼす要因が多様であるということ、職業社会に向けた予期的社会化がなされるということ、という特徴が指摘できる。

4. 予期的社会化とは何か

予期的社会化とは、将来参加するであろう社会システムの価値や規範、あるいは将来、付与されたり獲得したりするであろう地位や役割に関する知識や態度、技能などを学習することを意味する（Merton 訳書 1961）。予期的社会化が効果的に機能するためには、本人の集団に属したいという意思が必要となる。Merton(訳書 1961)によると、集団に所属することにまったく無関心でその見込みのなさそうな人や、その集団に所属する適格者であっても、様々な動機から所属しようとしなない人達に対して社会化を行なうことは

難しい。現在の所属する集団からはその諸価値を放棄したということによって排除され、自分が所属しようと思う集団からは受け入れてもらえなくなる可能性もある。また、予期的社会化は移動の余地のある、比較的開放的な社会構造の場合にのみ、個人にとって機能的となる。開放的な構造でない場合、地位の変化を見越して態度や行動を整えても、たいていの場合、実際に地位の変化がそれに伴わないからである。

予期的社会化は、集団への参入後の適応のためだけでなく、集団に参入するためにも必要となる。山口(2004)は、就職活動において企業が要求する価値観や態度を採用試験の面接担当者にアピールすることは、内定を得る上で有効に機能するが、このアピールができるかどうかは、大学で学ぶ専門教育が職業と直結しているかどうかによって異なる、と指摘する。卒業生の大半が同一の職業に就くような専門学校や専門職の養成を目的とする学部における予期的社会化はさほど困難ではないが、職業資格とうまくリンクしない専門領域を学ぶ学生の場合、進路志望そのものが不明確な場合が多く、どのような集団のいかなる価値・行動様式を先取りすべきかが明確でない。さらに、大学で要求される知識や態度と、採用試験の面接担当者が要求する知識や態度とは必ずしも一致しないため、職業生活への予期的社会化は困難となる（山口 2004）。つまり、学生の予期的社会化は大学における専門教育の影響を受けるといえる。

専門教育だけではなく、大学の序列もまた学生の進路を「予期」させるように機能している可能性がある。日本では大学と就職先の序列が対応しており（小方 2012）、選抜性の高い有名大学ほど大企業に就職する者が多く（樋口 1994、平沢 2005）、選抜性の低い大学からは大企業に就職することは難しい。よって、学生は大学の序列に対応した企業に就職することを「予期」して、自らを社会化している可能性がある。

5. 大学のチャーターが学生の予期的社会化に及ぼす影響

専門教育や大学の序列が学生の進路を「予期」させるのは、卒業生が特定の進路に進むという特権が社会から付与されているからだと考えられることもできる。このような特権を Meyer (1970) はチャーターと名付けた。チャーター (Charter) とは本来、自発的結社が禁止された中世に国王や政府が例外的に団体に権利や特権を与えた文書 (特権状) のことである (竹内 2016)。Meyer (1970) はこの用語を、プロダクトに対する社会的定義、具体的には、卒業生が特定の地位に就くこ

とに対する社会的特権・認可として用いた。

チャーターは①卒業生の実際の供給、②この供給に対する社会の認知や信念、③卒業生が特定の地位に就く正当性（正当な権利）によって構成される（Meyer 1972）。チャーターは、医者を生産する学校というように法律に規定されている場合から、エリート学校というような漠然と世評として存在している場合まで多岐にわたるが、特定の学校の卒業生のように、誰もが適切な職や地位に就くことに失敗しない場合や、他の人はその職に就けないことが法律や慣習で決まっている場合に（例えば、メディカルスクールなど）、学校は学生に最大限のインパクトを与えることになる（竹内 2016）。また、大学のチャーターは、就ける職を制限することによって、大学に行かないということの社会的意味を暗示する。専門職や管理職、公務員、軍人、知識人もしくは“教養人”といった特定の地位が大卒者であることによって得られるということは同時に、大学に行かなかった人達に対してはこれらの地位が得られない、という定義がなされるのである（Meyer 1972）。つまり、大卒者であるということが、非大卒者よりも特権を有するというを示唆する。

Astin の I-E-O モデルも Meyer のチャーターモデルも大学の効果を明らかにしようとするものであるが、Astin は大学の環境という内部効果に着目しているのに対し、Meyer は大学というブランド力、機関名からもたらされる外部効果に焦点をあてているという違いがある、と山田(2010)は指摘する。しかしチャーターには社会化効果がないわけではない。むしろ、学校や卒業生が社会的に定義されているという文脈効果を背景として、学校内部の社会化効果を強化する（ギア効果を有する）と竹内（2016, pp.281-282）は主張する。志水（1987）もまた、チャーター理論のポイントは、学生が大学チャーターを内面化することによって自己社会化をもたらす点にある、と述べている。大学ではなく高校についての言及ではあるが、竹内(2016, p.282)は進学校のチャーターがないときに、進学に熱心な授業をする教師や勉強に励む生徒が生徒仲間から浮いてしまうのは、生徒仲間集団が自分達のチャーターをよく知っているからであり、チャーターに合致しない内部的社会化は効果を半減するか失効する、と述べている。このことを踏まえれば、大学における社会化も社会的文脈を考慮せずに行えば、期待する効果を得ることは難しいことが示唆される。チャーターは社会化の方向性を規定するのである。

チャーター理論を用いた実証研究としては丸山（1980, 1981）が挙げられる。丸山は入試難易度の異

なる5つ大学の経済学部4年生に対して質問紙調査を行い、希望する企業規模や就業に対する価値規範と、大学の入試難易度の関連について分析した。その結果、入試難易度の高い大学の学生ほど、父親の学歴や職業、出身高校のタイプといった過去の属性にかかわらず、大企業を志向し、組織で活動することに魅力を感じていたのに対し、入試難易度の低い大学の学生ほど、独立志向が強く、過去の属性の影響を受けやすいことが明らかにされている。このようなキャリア志向の違いは、学生が大学のチャーターを内面化した結果だと考えることもできる。

6. 序列の低い大学におけるチャーターの機能と効果

近年では大学の多様化が進み、選抜性を失った大学では従来の大卒者が得ていた職業上の社会的特権を失いつつある。特に序列の低い大学の卒業者の場合、ホワイトカラー職よりも、販売職や保安・サービス職などのグレーカラー職（山内 2014）に就くことが多い。序列の高い大学とは異なり、大卒者であることがホワイトカラー職に就くという特権につながらない序列の低い大学の場合、大学チャーターはどのように機能するのだろうか。

Deil-Amen & Rosenbaum（2004）は7つの公立コミュニティ・カレッジと7つの私立職業大学に対する質的調査を行い、職業大学がどのようにして地域の「職業大学」というチャーターを形成・維持し、準学士を付与する教育機関としての地位を高めていったのかを明らかにした。アメリカにおけるコミュニティ・カレッジと職業大学は、共に2年制の大学であり、社会階級や学力の低い学生が多く、学士号よりも低い準学士号しか授与できないという点において、伝統的な4年生大学よりも威信が低い。さらに私立の職業大学は、公立のコミュニティ・カレッジよりも大学規模が小さく、提供できるカリキュラムも少ないうえに、授業料が割高であるという点において、より不利な状況にある。にもかかわらず、調査対象とした7つの職業大学では、スキルの向上が見込まれる安定した職に卒業生を斡旋し、卒業生の職業地位向上に貢献するとともに、地元企業に有能な学生を輩出する「職業大学」としての存在価値を高めていた。

調査対象とした7つの職業大学が存在価値を高めることができたのは、職業大学が準学士号を授与する大学というチャーターを維持するだけでなく、地域の企業に有能な学生を輩出する大学というチャーターを新たに形成していたからだと Deil-Amen &

Rosenbaum は主張する。職業大学は特定の職種における供給元としてのチャーターを獲得するために、雇用主と関わる機会を頻繁に設け、企業側のニーズを捉えると共に、雇用主が求めるスキルを習得できるようなカリキュラムを開発し、学生に提供していた。また、企業の人材需要に対して即座に適切な人材を供給できるような就職斡旋の仕組みを学内に作っていたのである。

他方、コミュニティ・カレッジは学位授与を主な責務と考え、職業大学が行っているような取り組みを行なう必要はないと信じていた。伝統的な大学と同じようなチャーターを持っているかのように振る舞い続けていたのである。その結果、コミュニティ・カレッジは存在価値を高めることにも、学生の社会化にも失敗していた。コミュニティ・カレッジが維持・形成しようとしていたチャーターは、社会が認識しているチャーターとは一致していなかったため、学生に対してインパクトを与えることができなかったのである。Meyerら（訳書 2015）は、コミュニティ・カレッジが卒業生に対してポジティブな効果をあまり与えないことを指摘しているが、それはチャーターに対する認識のずれによる可能性がある。

このように、威信の低い2年制大学のように伝統的な大学と同じようなチャーターを持っていない大学の場合、伝統的チャーターを持っているかのように振る舞うことは、大学の存在価値を高めることにも学生の社会化にも失敗することにつながる。よって、Deil-Amen & Rosenbaum (2004) が対象とした職業大学では、大学独自の強みを強調し、従来とは異なる新たなチャーターを形成していたことが明らかにされている。もちろん、威信の高い学校であってもチャーター維持のための取り組みは行われている（例えば、大学ではなく高校についての言及ではあるが、名門ボーディングスクールにおけるチャーター維持のための取り組みを質的調査から明らかにした Persell & Cookson 1985など）。しかし、威信の高い大学がチャーターを維持することよりも、威信の低い大学が存在価値を高めるために新たなチャーターを形成することのほうが、より難しいと考えられる。

7. 今後の課題

本稿では、大学における社会化効果に関する先行研究を概観してきた。その結果、大学における社会化は初等・中等教育とは異なり、過去の社会化の影響を受けながら、未来に向けた予期的社会化が必要であること、予期的社会化には大学・学部の専門教育や大学の

序列といった大学のチャーターが影響を及ぼすことが明らかになった。

しかしチャーター研究は、大学を卒業することで特定の職業に就く特権を得られるような学部や大学を対象とした研究が多く、人文社会系学部のように職業的レリバンスの低い学部や、序列・威信の低い大学を対象とした研究に対する蓄積は少ない。Deil-Amen & Rosenbaum (2004) の研究は、威信の低いコミュニティ・カレッジと職業大学を扱っているが、これらは2年制の大学であり、4年制の大学でも同様の知見が得られるのかは定かではない。威信の低い4年制大学では、コミュニティ・カレッジのように伝統的の大学と同様のチャーターを採用するのか、職業大学のように新たなチャーターを形成することによって地位を高めようとしているのか、いずれにも該当しない新たな方法を用いているのかを明らかにする必要があるだろう。

また、大学チャーターと合致した進路を望まない学生はどのように社会化されるのかについては明らかにされていない。社会化には主体的な側面もあることを踏まえれば（柴野 1977, 1985）、チャーターを受け入れない学生を対象とした調査も必要であろう。今後の課題としたい。

【引用文献】

- 阿部耕也(2011)「幼児教育における相互行為の分析視点: 社会化の再検討に向けて」『教育社会学研究』第88集, pp.103-118.
- 荒川葉(2009)『「夢追い」型進路形成の功罪』東信堂.
- 麻生誠(1974)「近代学校の社会的性格」麻生誠編『社会学講座10 教育社会学』東京大学出版会.
- Astin, Alexander W. (1993) *What matters in college?: four critical years revisited*, Jossey-Bass.
- Brim, O. G. Jr. (1966) Socialization through the life cycle, *Socialization After Childhood*, ed. O. G. Brim, Jr., S. Wheeler, Wiley, pp. 1-49.
- Clark, Burton R., & Martin Trow (1966) The organizational context of the American University, T. M. Newcomb and E.K. Wilson ed., *College Peer Groups*, pp. 17-70.
- Deil-Amen, R. & Rosenbaum, J. E. (2004). Charter building and labor market contacts in two-year colleges. *Sociology of Education*, 77(3), pp. 245-265.
- 濱中淳子(2013)『検証・学歴の効用』勁草書房.
- 平尾智隆・梅崎修・松繁寿和(2013)『教育効果の実証

- キャリア形成における有効性』, 日本評論社.
- 本田由紀編(2018)『文系大学教育は仕事の役に立つのか: 職業的レリバンスの検討』, ナカニシヤ出版.
- 樋口美雄(1994)「大学教育と所得配分」石川経夫編『日本の所得と富の分配』東京大学出版, pp.245-278.
- 平沢和司(2005)「大学から職業への移行に関する社会学的研究の今日的課題」『日本労働研究雑誌』No.542, pp.29-37.
- 金子元久(2007)『大学の教育力—何を教え, 学ぶか』筑摩書房.
- (2012)「大学教育と学生の成長」『名古屋高等教育研究』第12号, pp.211-236.
- (2013)『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ』玉川大学出版部.
- 粕谷圭祐(2018)「児童的振る舞いの観察可能性—「お説教」の協働産出をめぐる相互行為分析—」『教育社会学研究』第102集, pp.239-258.
- 小山治(2019)「レポートに関する学習経験の職業的レリバンス」『大学教育学会誌』41(1), pp.61-65.
- Margolis, Eric 編(2001) *The Hidden Curriculum in Higher Education*, Routledge.
- 丸山文裕(1980)「大学生の職業アスピレーションの形成過程: チャーター理論による大学の効果分析」『名古屋大学教育学部紀要(教育学科)』第27巻, pp.239-249.
- (1981)「大学生の就職企業選択に関する一考察」『教育社会学研究』第36集, pp.101-111.
- 松高政(2008)「大学の教育力としてのキャリア教育—京都産業大学におけるパネル調査分析から」『京都産業大学論集 社会科学系列』(25), pp.145-168.
- Merton, R. K. (=1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳, 『社会理論と社会構造』, みすず書房).
- Meyer, J. W. (1970). The charter: Conditions of diffuse socialization in schools, W. Richard Scott (ed.) *Social Processes and Social Structures: An Introduction to Sociology*, Henry Holt Co. pp. 564-578.
- (1972). The effects of the institutionalization of colleges in society, *College and Student*, Pergamon. pp. 109-126.
- , Ramirez, F. O., Frank, D. J., Schofer, E. (=2015「制度としての高等教育」伊藤彰浩・橋本絃市・阿曾沼明裕訳『高等教育の社会学』, 玉川大学出版部, pp.243-286.)
- 溝上慎一(2018)『大学生白書2018:いまの大学教育では学生を変えられない』東信堂.
- 三保紀裕(2013)「キャンパス外の活動が学修に与える影響について—アルバイトに着目した検討—」『京都学園大学経済学部論集』23(1), pp.107-118.
- 森岡清志(2016)『社会学入門 改訂版』放送大学教育振興会.
- 中西祐子(1998)『ジェンダー・トラッカー—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』, 東洋館出版社.
- 小方直幸(2008)「学生のエンゲージメントと大学教育のアウトカム」『高等教育研究』11, pp.45-64.
- (2012)「学歴と職業」加野芳正・越智康詞編『新しい時代の教育社会学』ミネルヴァ書房, pp.186-197.
- 大多和直樹(2019)「大学生(学生)研究と高校生(生徒)研究の〈溝〉:〈溝〉を超える新しい大学生研究に向けて」『教育社会学研究』第104集, pp.105-124.
- Persell, Caroline H and Cookson, Peter W. (1985) *Chartering and Bartering: Elite Education and Social Reproduction, Social Problems*, Vol. 33, No. 2, pp. 114-129.
- 作田良三(1999)「大学生の社会化に影響を及ぼす学的・社会的環境の研究」『広島大学教育学部紀要第一部 教育学』(48), pp.21-28.
- 関口倫紀(2010)「大学生のアルバイト経験とキャリア形成」日本労働研究雑誌, 52(9), pp.67-85.
- 柴野昌山(1977)「社会化論の再検討—主体性形成過程の考察—」『社会学評論』27(3), pp.19-34.
- (1985)「教育社会学の基本的性格」『教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社, pp.3-22.
- 志水宏吉(1987)「学校の成層性と生徒の分化—学校文化論への一視角—」『教育社会学研究』第42集, pp.167-181.
- 杉山成(2007)「アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか」『人文研究』,113, pp.87-98.
- 武内清(2003)『キャンパスライフの今』玉川大学出版部.
- (2008)「学生文化の実態と大学教育(特集 大学生論)」『高等教育研究』11, pp.7-23.
- ・岩田弘三(2011)『子ども・若者の文化と教育』放送大学教育振興会.
- 竹内洋(2016)『日本のメリトクラシー 構造と心性【増補版】』東京大学.
- 椿明美・和田佳子(2020)「人文・社会科学系大学の

- 学び・経験と職業的レリバンス」調査』『九州大学教育社会学研究集録』(20), pp.11-20.
- 山田礼子(2008)「学生の情緒的側面の充実と教育効果—CSSとJCSS結果分析から—」『大学論集』第40集, pp.181-198.
- (2010)「大学教育の成果測定—学生調査の可能性と課題」『クオリティ・エデュケーション』3, pp.15-32.
- 山口洋(2004)「4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か? :ある私大での追跡調査」『社会学部論集』第38号, pp.49-62.
- 山内乾史(2004)『現代大学教育論:学生・授業・実施組織』東信堂.
- (2014)「大学生の学力と進路職業選択」溝上慎一・松下佳代編,『高校・大学から仕事へのトランジション:変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版.
- Weidman, J. C. (1989). Undergraduate socialization: A conceptual approach. J. C. Smart (Ed.), *Higher education: Handbook of theory and research*, Vol. V, Agathon Press. pp. 289-322.

Characteristics of College Socialization: Preparation for the Work World and the Privileges Attributed to Diverse Departments and Colleges in the Social Hierarchy

Miyuki KIKUCHI*

This paper is a literature review that aims to clarify the characteristics of college socialization that differ from primary and secondary education, including an analysis of the factors which influence students' anticipatory socialization. This analysis shows that college socialization is influenced by past socialization. It describes how anticipatory socialization is necessary to prepare students for entrance to the work world, and that college charters such as the academic lineage of a college or department, as well as the college social hierarchy, influences anticipatory socialization. To date, most research on college charters has been conducted on colleges where graduating from a college provides the privileges associated with a specific job; there has been little research conducted on departments with lower relevance to occupational prestige, such as with the humanities and social sciences departments, or with colleges of less prestige. This paper points out the necessity of clarifying the type of socialization that occurs in colleges that do not have a specific charter.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University